

序 (1)

今日、教会はかつてないほどの人で賑わい、豊かきの時代を迎えている。⁽¹⁾ こうした状況では通常、この故に、人は何につけても楽観的になり、喜びに沸くものであろう。しかし、現状は意外にもそうではない。思慮に富む信仰のリーダーや見識あるクリスチャン信徒の多くが、違和感や懸念の思いが膨らみつつあると口にする。見事な会堂が建てられ、会員数も増大。数々の活動が教会内で活発に行なわれている。にもかかわらず、何かしら重大な点で 昨今のキリスト教は真っ当でない、というのである。何か、その中心部分で誤っている。いのちと力を失う危険性がある。カール・ハイム (Karl Heim) ⁽²⁾ が指摘するように、「教会は、デッキで依然として楽しい催しが続けられ、素晴らしい音楽が聞こえる船のようだ。がその一方で、〔船体が海面と接する〕⁽³⁾ 吃水線の下方深いところで浸水の亀裂が入り、大量の水が流入している。それがため、船は時とともに沈みつつある。排水作業に日夜、人員を充てているにもかかわらず」¹。もしこれが事実なら、我々の問題は決して小さなものではない。我々のように生涯を神に^{ささ}げた者たちにとって、事はまさに、実存の中心を揺るがす。我々の手で教会を終わらせたくはないし、我々の落ち度が教会のそれを助長するようなことも欲しない。したがって、本書を当該関係者への呼びかけとして著すものである。

本書の論拠たる見解は、多くの証左が示すところとして、組織制度偏重主義が我々の教会の生命力を脅かしつつある、ということである。どうすればこの状況を変えられるのか、危惧する人々が思案しては^{いら}つくのも不思議でない。そこで直面するのは、難題である。多くの者たちが問う、「組織制度偏重主義へと向かうこの潮流を 我々は食い止め、経験的性格の信仰を回復することができるか」と。これは容易に答えるような問いではないし、確定的な答えを出しうる問題でもない。歴史が^{あか}証すのは、運動に類するものはいかなるものも組織や制度の偏重に陥る向きがあるということである。これは歴史上の宗教運動に生じたことであり、現代のそれもまた、例外とは思われぬ。社会学の「決定論者 (determinist)」が主張するところによれば、こうした社会学的現象のパターンというのは不可避なもの、という。変えられえない、と言うのである。しかしながら、これとは異なり、人間は「目的に即した調整制御 (purposive control)」を行ない、そのようにしてある程度、関与する運動の^あ有り様を形成し、またその方向性を決めることができる、と考える人たちもいる。我々がはたして、そうした調整制御を実践するに十分なほど理知的かつ勇敢であるや否や、それはただ、この先の歴史が告げてくれよう。

事の解決には、根本的で大胆なアクションがキリスト教のリーダーや教会員らの側に求められることになる。我々は「神の民 (people of God)」として 今日の世界においていかなる存在であるべきなのか、また何をなすべきなのか、聖書の教えに照らして、いま一度 明確にする必要がある。これに関わる主要な教義の幾つかを明らかにし、それらに即して、教会のいのちと働きはいかにあらねばならないか、それを提示するのが本書の主たる課題である。そこでは、一つの神学的立場が前提

となっている。ただし本書では、採用したその立場の論述弁護にはほとんど紙幅を割いていない。本書の一義的目的はむしろ、次のように問うことにあるからである。「このような神学的立場に立った場合、その教義に照らして、教会はいかなる存在であるべきか、また何をなすべきか」

第Ⅰ章では、本書全体の課題たるその問題点の明確化を図っている。キリスト教は今日、隆盛を享受しているように見える。しかし、それはいかなる類いのキリスト教か？ 新約聖書本来の信仰か？ それとも、我々は知らずのうちに、そこから大きく踏み外してはいないか？ 今日こんにちの教会には不十分な点がある、と認める人たちもいる。が そんな彼らも、ただしそれらは⁽⁴⁾ いつの時にも付きものの慢性的疾患のようなものにすぎない、と主張する。しかしながら、我々の目下の欠陥が単に小さな病弊なのか、あるいは本質的により深刻なそれなのか、いかにしたらそれが言えるであろうか。見た目の成功がはたして本物か否か、我々はいかなる基準によって これを確認しうるのであろう。

これらの問題は、新約聖書とキリスト教の歴史を踏まえて初めて答えることができる。こうした背景を明らかにするため、第Ⅰ部で3つの宗教運動を概観する。いずれも生命力に満ちた活力ある運動として始まり、多大な成功を収めた。がしかし、その後いつしか 生氣のない死んだ形式主義に陥り、そのような信仰表現ばかりになっていった。これら過去の宗教運動を振り返るとき、我々はそこに、わずか前の我々自身の姿が映し出されているのを見ることができよう。現在のそれも確認することができる。そして、幾分かの想像力をもってすれば、我々の将来をも予見しうるかもしれない。このような歴史的背景に照らし、我々の現下の状況を分析したいと思う。

第Ⅱ部では、我々の教会の現状分析から始め、キリスト者としての生活の本質とその意味について探求する。神が人をキリスト者として召すとき、神は、その人がいかなる存在でいかなる事をなすようにと召されるのか。この問題を 選びの教義と信仰者の祭司性 (priesthood of believers)⁽⁵⁾ という教義に照らして、さらには神の御心みこころという概念をその視点として探ることになる。

第Ⅲ部では、第Ⅱ部で得た答えを背景として、続けて 次のような問題について検討する。「人はいかにして、キリスト者としての生活に入るのか」。ここでは人間存在をめぐる教義について吟味し、人間の基本的必要を確認するとともに、これを満たすために神が何をなされたかをも明らかにする。そのうえで、そこで見出された答えに基づき、一つの提案を行ないたい。すなわち、教会の基本的務めとは一つに いかなるものであらねばならないか、についてである。そして、これに続いて直面するのがことさらに難題である。つまり、人の救われるのがもし「恵みにより、信仰を通して (by grace through faith)」⁽⁶⁾ だとしたら、その「信仰 (faith)」の中身とはいったい何なのか、ということである。救いの関係の根本を成す本来の信仰というものがある一方、しかしまた、ヤコブ書によれば、無意味な (worthless)⁽⁷⁾ 見せかけの信仰もあるという。であれば、本来的なこの信仰の本質とはいかなるものか。こうして得られた答えに照らし、ここでは、教会が従うべき伝道の在り方について提言を行なうことになる。

最後に第Ⅳ部で論ずるのが、「我々はいかにしたら、新生者の教会という理想により適切に近づきうるか」という問題である。我々の主張はたしかに「信仰者のバプテスマ (believer's baptism)」のみの実施だが、現実には、我々の教会は今や新生者のそれとはなっていないというのが大方の認め

るところであろう。我々ははたして、より良い方策を見出し〔新生者の教会という〕この教義の実現に努めるべきなのか、それとも、引き続き妥協を続けるべきなのか？ そしてもし、教義の実践に真剣に取り組もうとした場合、教会のいのちと働きとして、そこで何がなされねばならないのであろうか。

〔本書を著すに際して〕決定せねばならなかった難題のうち最たるものの一つは読者に関するもので、誰に向けて本書を執筆すべきか、ということだった。すなわち、〔教派を超えた〕より広範なキリスト教界に向けてか、それとも、著者自身の教派に絞ってそうすべきか？ 当初の思いは自然なもので、それはキリスト教の広範な共同体に向けて書くということだった。著者の考えるところ、本書で扱う問題はどの教派にとっても基本的なそれと言って おそらく間違いない、と思われるからである。また、書を著す者にとって、読者候補の範囲をできるかぎり広範にしたいと願うのはしごく当然のことと言えよう。

決断は、しかしながら、本書を専ら著者自身の教派との関連のなかでまとめる、ということにした。理由は次のとおりである。第一に、本書をより広範な人々に向けて著すとしたら、今よりはるかに一般的な用語表現でそうすることが必要になったであろう。しかし、そうすることでもって、論考の具体的かつ明確な「鋭さ (cutting edge)」が失われたとも考えられる。しかもそれは、問題の本質からして、決定的に必要なものなのである。第二は、著者が他教派の内情に十分精通しているとは言えなかったことである。そして、その種の情報に不足している以上、著者は、他派の教会の生活やプログラムについて分析しうる適格者ではなかった。第三に、この種の分析は時に批判的になるやもしれず、内部の者が行なうべきである。すなわち、自身が属するグループに自ら積極的に参与し、真の成功についてはこれを喜ぶとともに、不十分な点についてはその責任を進んで共に負う人間である。そして第四に、特定の一教派に絞って扱うという仕方は、他派の読者にとっても極めて望ましく思われた。つまり、著者は自身の教派の働きについてその不十分な点を具体的かつ明確に指摘しようとしたのだが、読者はこれに促され、自らの教派にも同一のもしくは同様の不十分さが存在しないか否か 熟考するようになるのでは、ということである。また、著者は自身の教派のために具体的提言を行なっているが、読者は各自のグループの本質と働きの観点からこれを検討評価するのでは、ということである。少なくとも、そうあってほしいと願っている。

本書に示す提言については たしかに、過激で現実的でないと言う人もいるであろう。しかし、過激だからといって、だからそれらが間違っているということにはならない。また、現実にはぐわないうことは 要するに、今日の教会が組織制度偏重主義へと向かう道をいかに遠くまで来てしまったか、ということを示しているのかもしれない。本書において常に著者の頭から離れなかったのは、次のような一つの問いである。「聖書の教えに照らして考えるとき、我々は神の民として 今日の世界においていかなる存在であるべきか」。したがって、この問いの意味するところを探って理解し、教会のいのちと働きにおいてその本質を回復すること、これが本書の基本的課題と言える。そこで生じるやもしれぬ変化がどれほど劇的なものであっても、である。過去の類例も人々の伝統も、

はたまた「プラクティカルにいこう」との掛け声も、根本的なこの探求を妨げるようなことがあってはならない。

(続く)

注

1. Karl Heim, *Christian Faith and Natural Science* (New York: Harper & Bro., 1953) 24.

訳注

(1) 原著初版本の執筆は 1963 年で、ここで言う「今日」^{こんにち}とはその頃のこと。第二次大戦後の当時、南部バプテストの諸教会は破竹の勢いで教勢を拡大していた。

(2) ドイツのプロテスタント神学者。1874～1958 年。ルター派の敬虔主義^{けいけんしゆぎ}的立場から、現代思想を論じた。反ナチズムの堅持者としても知られる。

(3) [] 書きは、訳者の補筆挿入。

(4) 以下、「いつの時にも付きものの」および「しかしながら、我々の目下^{もっか}の欠陥が単に小さな病弊なのか」「いかにしたらそれが言えるであろうか」は、原著からの補記訳出（改訂版抜け落ち）。

(5) "priesthood" にはしばしば「祭司制」という訳語が当てられるが、これは誤りで、正しくは「祭司性」。すなわち、ここでの文脈に即して言うなら、信仰者誰もが制度や職分としての祭司であるということではなく、信仰者であれば誰であれ、そこにはそもそも祭司的な特性や特質が伴う、という意味。

(6) よく知られたこの一節はエフェソ 2:8 にあるものだが、新共同訳聖書では「恵みにより、信仰によって」、口語訳聖書では「恵みにより、信仰による」、そして文語訳聖書では「恩恵^{めぐみ}により、信仰によりて」と訳出されている。ちなみに、原語のギリシア語ではそれぞれ、"τῆ^テ χάριτι^{(イ)カリテイ}" "διὰ^{ディア} πίστεως^{ピステオース}"となっている。ここでは、翻訳原著の英文に従い、直訳的に訳出している。

(7) ヤコブ 1:26。

(矢野 眞実訳)